

# 植物と私たちの暮らしについて考える ―綿の栽培を通して学んだこと―

奥田 多美栄(社会人コース)

## 1. はじめに

私たちの日常生活は、衣食住どれを取り上げても自然との関係を切り離すことはできない。特に植物は食品、衣料品、医薬品、その他さまざまな分野の材料として使われている。しかし、現代の生活では植物と私たちの生活とのかかわりを考えたり、実際に利用されている過程を目にしたりする機会はほとんどない。日々の生活の中で意識することなく大量にいろいろなものを消費することに慣れてしまった今こそ、ものの起源を知り、本来の価値を見直すべきなのではないだろうか。

## 2. 研究の目的と方法

具体的な方法として綿の栽培を取り上げ、植物がどのように私たちの生活に活用されてきたかを調べ、私たちの暮らしのあり方について考えてみることにした。

## 3. 研究の内容

### ①綿の歴史

綿は、6000年前にペルーの沿岸地域で、4500年前にアフリカで、5000年前にはインドに存在していたことが確認されている。長い歴史の中で50種の野生種のうち4種が栽培化され、世界各地でそれぞれの文化と融合してきた。綿の栽培は原産地以外にも拡大し、改良され世界各地に渡り、農業生産の発展にもつながった。ヨーロッパ特にイギリスでは綿の大量輸入から大量栽培、効率よく商品化するための機械による大量生産、産業革命へと展開していった。そして、これらの経済発展に伴い農村地帯の過疎化、児童の長時間労働、安価な労働力確保のための奴隷制度、ひいてはアメリカの南北戦争にいたるまでさまざまな社会問題が起きてきた。現代においても機械化、高い生産性を維持するための大量の農薬使用が人々の健康被害や環境問題の要因となっている。

### ②綿の栽培（種蒔き・収穫・綿から綿糸へ）

2010年と2011年の2回にわたって綿の栽培をした。2011年5月上旬に種を蒔いてから1週間くらいで発芽した。6月中旬には10cmくらいに成長し、雨の合間をぬって畑に移植した。1週間ごとに5個体の成長の様子を測定したが、7月になってからの成長には目を見張るものがあった。7月下旬には花が咲き、9月中旬にはコットンボールが開裂した。

綿から糸になるまでの工程には「綿くり」「綿うち」「糸つむぎ」があるが、実際の作業の仕方と必要な道具については琵琶湖博物館の「織姫の会」を訪ね、教えていただいた。江戸時代から使われているという道具を見せていただいたが、うまく考えられていることにとても感心した。教えていただいたことをもとに手作りの道具で糸を紡ぎ、織ること、編むことに挑戦してみたが、なかなかたいへんな作業であることがわかった。

## 4. おわりに

栽培を通して、一粒の綿の種と世界の歴史の関係を改めて考えることができた。綿の栽培によって世界の文化や産業が受けた影響は大きい。最初は小さな収穫に満足していた私たちはいつしか大量生産、大量消費をあたりまえと考えるようになり、その中で忘れていること、見失っていることがたくさんあるのではないだろうか。

栽培活動はかなり時間と労力を必要とするが、収穫できた時の感動や喜びは格別で得るものは多い。今回、実際に綿を育ててみたことで、その歴史から現在世界で起きている環境問題まで知ることができた。一つの栽培活動から様々な分野に迫ることができ、その教育的価値は大きい。今後は、より多くの人々にこのような体験をしてもらえるよう働きかけていきたいと思う。